



理事長
伊藤 真人

紀元前400年頃、ギリシャ・コス島の医聖ヒポクラテスは小児特有の耳鼻咽喉科疾患を多々記載しています。子どもの扁桃炎や急性中耳炎が死に直結する病気として恐れられていたことなども記載されており、これらが乳幼児・小児期の死亡原因の大きな要因であったことを示しています(資料提供:加我君孝先生)。



加我君孝先生ご講演スライド

近代「小児耳鼻咽喉科」の歴史は1890年代のヨーロッパ、ポーランドに遡ります。1893年、欧州留学を終え帰国した金杉英五郎先生が、当時独立していた耳科、鼻・咽頭科、喉頭科の3つの診療科を耳鼻咽喉科として体系づけ、現在の日本耳鼻咽喉科頭頸部外科学会の源流となる「東京耳鼻咽喉科会」を創設されましたが、ちょうどそのころ、1895年ワルシャワ小児病院には小児耳鼻咽喉科が開設されました。一方、日本小児耳鼻咽喉科学会は2006年に創設されてから15年になりますが、前身の小児耳鼻咽喉科研究会は1979年に発足しており、ヨーロッパ諸国や米国の小児耳鼻科学会とほぼ同じ40年余の歴史があります。世界的にも「小児耳鼻咽喉科学」は、耳鼻咽喉科のサブスペシャリティ

領域の一つとして広く認知されていますが、わが国においてはまだ途上にあります。現在、学会の会員数は1,300~1,400名で緩やかな増加が続いており、耳鼻咽喉科関連学会では中堅規模の学会です。本学会には耳鼻咽喉科医のほか、小児科医や小児外科医、言語聴覚士などが会員となっており、学際的に広く開かれた学会です。

現在の「コロナの時代」における小児耳鼻咽喉科学会の果たす役割は、withコロナとその先に続くafterコロナ時代の小児耳鼻咽喉科医療の在り方を模索することです。ともすると悲観的になり萎縮しがちな昨今ですが、小児耳鼻咽喉科学の魅力を発掘し若い世代に発信して、次世代の小児耳鼻咽喉科学を担う、若手医療者の積極的登用・育成を目指しています。

終わりに



元東京大学 小児科 教授

小林 登 先生(1927-2019)の言葉

“子どもは未来である”

「子どもは未来である」そして、私たち日本小児耳鼻咽喉科学会の願いは、「未来ある子どもたちにできること」を最大限に実践することにあります。私たちはフレキシブルで活力に溢れた、若い先生方の力を必要としています。ぜひ、小児耳鼻咽喉科で活躍していただきたいと願っています。